

# 第1章

## 教育課程編成

- 第1節 年間授業時数
- 第2節 時間割設定の工夫  
(西島 央)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編

## 第1節

## 年間授業時数

小学校では、56.8%が標準年間総授業時数を超える時数を設定し、各教科・領域等の年間授業時数も「全般型」「国・算型」「英語型」「特別活動型」など多様な配当タイプがみられる。中学校では、標準年間総授業時数を超える時数を設定しているのは22.9%にとどまり、「総合的な学習の時間」「選択教科」の時数設定で時間割の多様化を図っている。

【Q2(学校)】

現行の学習指導要領で定められている年間授業時数は、標準的なものであり、各学校が地域の状況や児童・生徒の実態にあった授業時数を定められることになっている。とくに、学力低下の懸念が社会問題となって以来、年間授業時数を標準どおり確保するだけでなく、標準時数を超えた設定をする学校もみられるようになってきた。では、現在、小・中学校では、どのような授業時数の設定をどのくらいの学校がしているのだろうか。年間総授業時数と各教科・領域等の年間授業時数の設定状況を学校調査の結果からみていくことにしたい。

### 1) 年間総授業時数は、5割強の小学校が標準より多く設定、中学校は7割が標準どおり

小・中学校では、年間総授業時数をどのように設定しているのだろうか。図1-1-1は、小・中学校の学年ごとの年間総授業時数の設定状況をまとめたものである。

小学校では、どの学年でも「標準どおり」に設定しているのは4割前後で、5割強が標準を上回る設定にしている。標準年間総授業時数からの上回り方としては、小1～小3生は「標準より36～70時間多い」と「標準より71時間以上多い」がともに2割程度だが、小4生から上回る授業時数が増えてきて、小5～小6生では「標準より36

～70時間多い」が1割程度なのに対して「標準より71時間以上多い」は3割程度にもおよんでいる。このことから、学年が上がるにつれて、標準年間総授業時数をより多く上回るように設定する傾向があることがわかる。

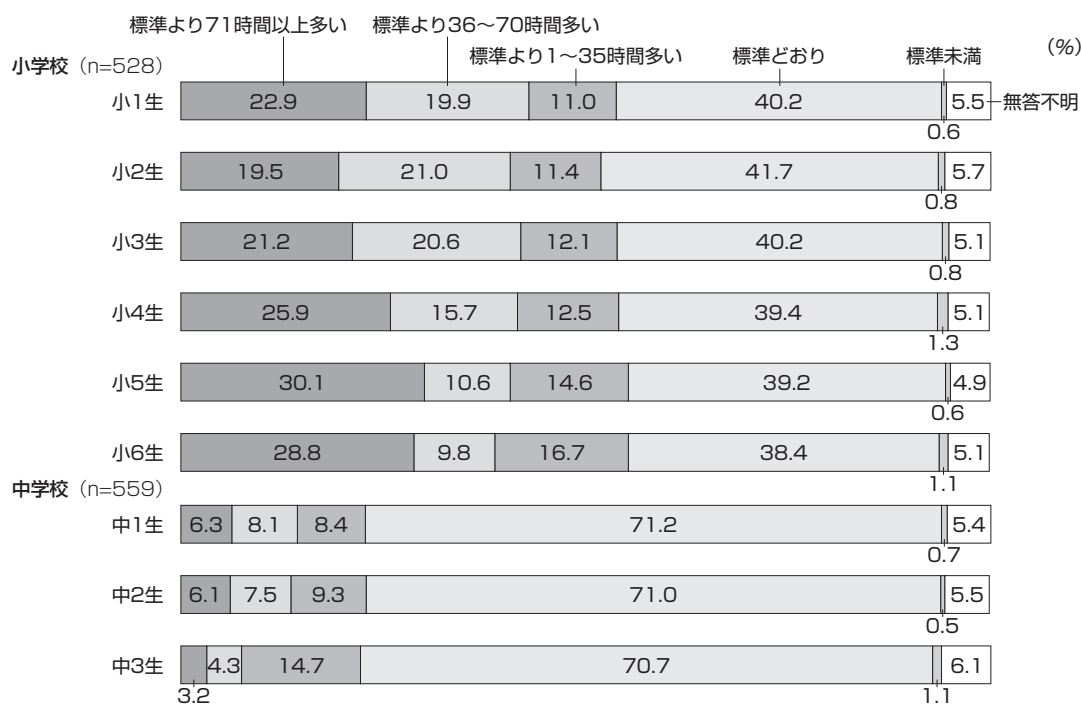
一方、中学校はどの学年も7割ほどが「標準どおり」に設定していて、標準を上回る設定をしているのは2割程度である。標準年間総授業時数からの上回り方としては、小6生で多くみられた「標準より71時間以上多い」は中1～中2生が6%ほどで、中3生では3.2%しかない。また、中3生では「標準より1～35時間多い」が14.7%と中1生や中2生よりも多く、標準からの上回り幅が小さい。

もともと標準年間総授業時数が小6生よりも35時間多く設定されている中学校では、完全学校週5日制のなかで授業時数をこれ以上増やすことは難しいのかもしれない。または、「選択教科」の時間を上手に活用することで対応しているのかもしれない。なお、標準年間総授業時数を下回る設定は、小・中学校ともほとんどみられなかった。

### 2) 年間総授業時数設定のタイプは、小学校の56.8%、中学校の22.9%が「標準超過型」

では、年間総授業時数の設定にあたって、学

図1-1-1 年間総授業時数設定の状況（小・中学校／学年別）



注) 授業時数についての選択肢の区分と表記のしかたは巻末の基礎集計表(学校調査)と異なっている。また、標準より多い選択肢に対応する数値については、基礎集計表とは表示のしかたを変えている。

校全体としてはどのような傾向があるのだろうか。①全学年で標準を超えるか、一部に標準どおりを含む場合を「標準超過型」、②全学年で標準どおりを「標準型」、③1学年でも標準未満の学年がある場合を「標準未満型」とする3つのタイプに分けた結果を図1-1-2にまとめた。小学校では「標準超過型」が56.8%と半数以上に上り、「標準型」は34.1%と3分の1にとどまっていた、標準を超えて年間総授業時数を設定する学校が多数派になっている。一方、中学校では「標準型」が69.8%と全体の3分の2に上り、「標準超過型」は22.9%にすぎない。

### 3) 小学校の「標準超過型」は02年調査から増加傾向

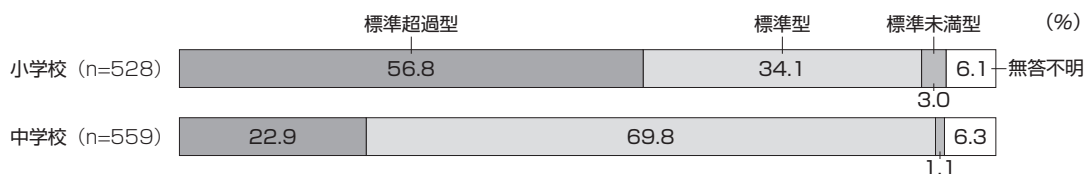
「標準超過型」の割合は、02年調査から変化しているのだろうか。「標準超過型」が多数を占める小学校を取り上げて比較してみよう。図1-1-3は、02年調査の結果（02年調査・比較14地域）と、今回の調査のうち02年調査と同じ調査地域だけを取り出した結果（07年調査・比較14地域）

と、今回の調査の残りの調査地域の結果（07年調査・その他の地域）の3つの、年間総授業時数タイプの分布を比べたものである。「標準超過型」の割合を比べてみると、「02年調査・比較14地域」の47.8%から「07年調査・比較14地域」の51.2%へとやや増加傾向がみられる。また「07年調査・その他の地域」は60.6%と、「07年調査・比較14地域」よりもさらに10ポイント近く「標準超過型」が多い。「07年調査・その他の地域」でより高い増加傾向がみられたのか、もともと2002年当時から「標準超過型」が多かったのかはわからないが、総じて、「標準超過型」は増加している傾向にあるのではないだろうか。

### 4) 「標準超過型」が多いのは東北、北関東、九州・沖縄

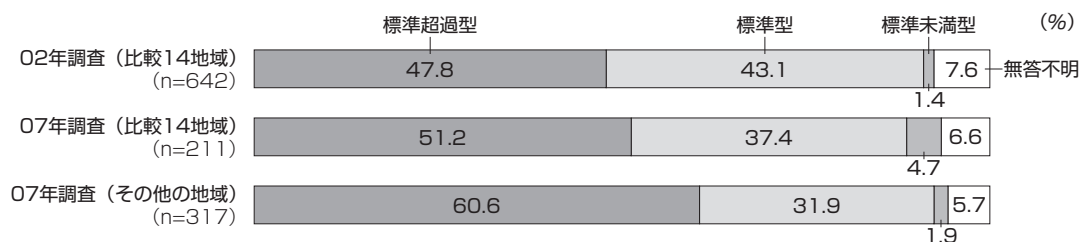
ところで、図1-1-2でみたように、小学校における年間総授業時数のタイプは、07年調査全体では「標準超過型」は56.8%だった。07年調査の「比較14地域」と「その他の地域」とで「標準超過型」の割合に約10ポイントの差がみられ

図1-1-2 年間総授業時数タイプ（小・中学校）



注) 年間総授業時数を、①全学年で標準を超えるか、一部に標準どおりを含む場合を「標準超過型」、②全学年で標準どおりを「標準型」、③1学年でも標準未満の学年がある場合を「標準未満型」に分類した。

図1-1-3 年間総授業時数タイプ（小学校／地域限定・経年比較）



注) 「比較14地域」は、北海道・岩手県・宮城県・群馬県・東京都・新潟県・石川県・山梨県・愛知県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県・熊本県である。

ることから推測すると、年間総授業時数タイプの分布には地域的な違いがみられるのではないだろうか。調査対象校を都道府県別にみると、地域ごとのケース数が非常に少なくなってしまうので、9つの地方に分けて「標準超過型」と「標準型」の割合を比較したのが表1-1-1である。

その結果、「標準超過型」は、東北（73.8%）と北関東（77.1%）と九州・沖縄（64.4%）に多く、北海道（35.7%）と近畿（38.6%）に少ないことがわかった。07年調査の「比較14地域」と「その他の地域」の間にみられた違いは、それぞれのサンプルに含まれる地域のバランスの違いによるものだと考えられる。

### 5) 小学校の教科・領域等別では「特別活動」「算数」「国語」の順に標準授業時数を超過する設定

ここからは、「国語」「算数」「道徳」「総合的な学習の時間」などの各教科・領域等の年間授業時数の設定状況について、小学校は小6生を、中学校は中3生を例にみていこう。

図1-1-4は小6生についてまとめたものであ

る。「標準どおり」に設定している割合は、もっとも少ないのが「特別活動」の55.1%で、もっとも多いのが「道徳」の80.1%だが、ほとんどの教科・領域で7割程度が「標準どおり」に設定している。このことから、年間総授業時数の「標準超過型」が56.8%もあるものの、それは教科や領域全般が標準を超過している設定になっていくのではなく、一部の教科や領域だけが超過している学校が多いということがわかる。

それぞれの教科や領域別に標準を超過している割合をみると、もっとも多いのは「特別活動」の39.4%で、次いで「算数」の30.9%、「国語」の30.1%となっている。「算数」「国語」はそのうちの3割ほどが「標準より11時間以上多い」設定をしていて、他教科・領域と比べて、標準を超過している割合も時数も多い。また、「特別活動」は標準を超えている割合のうち半数以上が「標準より36～70時間多い」以上の設定をしている。ただし、この時数は児童会活動やクラブ活動、学校行事などにあてられているようだ。

一方、標準を超えている割合が低いのが「道徳」の14.2%と「総合的な学習の時間」の15.5%だった。その他の教科や領域で標準を超えてい

表1-1-1 年間総授業時数タイプ（小学校／地方別）

	（%）			（%）	
	標準超過型	標準型		標準超過型	標準型
北海道 (n=28)	35.7	53.6	近畿 (n=57)	38.6	52.6
東北 (n=65)	73.8	16.9	中国 (n=51)	52.9	37.3
北関東 (n=35)	77.1	20.0	四国 (n=21)	52.4	42.9
南関東 (n=101)	55.4	39.6	九州・沖縄 (n=59)	64.4	27.1
中部 (n=106)	57.5	31.1	全国 (n=528)	56.8	34.1

注1) 全国には都道府県名不明の5校が含まれる。

注2) 北関東は、茨城県・栃木県・群馬県。南関東は、埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県。中部は、新潟県・富山県・石川県・福井県・山梨県・長野県・岐阜県・静岡県・愛知県。近畿は、三重県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県。

注3) 「標準未満型」と「無答不明」は省略した。

る割合は2割前後で、標準を超えている時数も「標準より1～5時間多い」がほとんどだった。また、「標準未満」の設定は、「総合的な学習の時間」の5.7%が目立つ程度で、他の教科・領域ではほとんどみられなかった。

では、個々の小学校では各教科・領域等の年間授業時数を実際にどのように配当しているのだろうか。標準年間総授業時数と各教科・領域等の標準年間授業時数について、標準どおりか、標準を超過しているか、標準未満か、標準を超過している場合は、どの教科・領域等で何時数くらい超過しているのか、といったことを考慮して、KJ法的に配当のパターンを分類してみた。

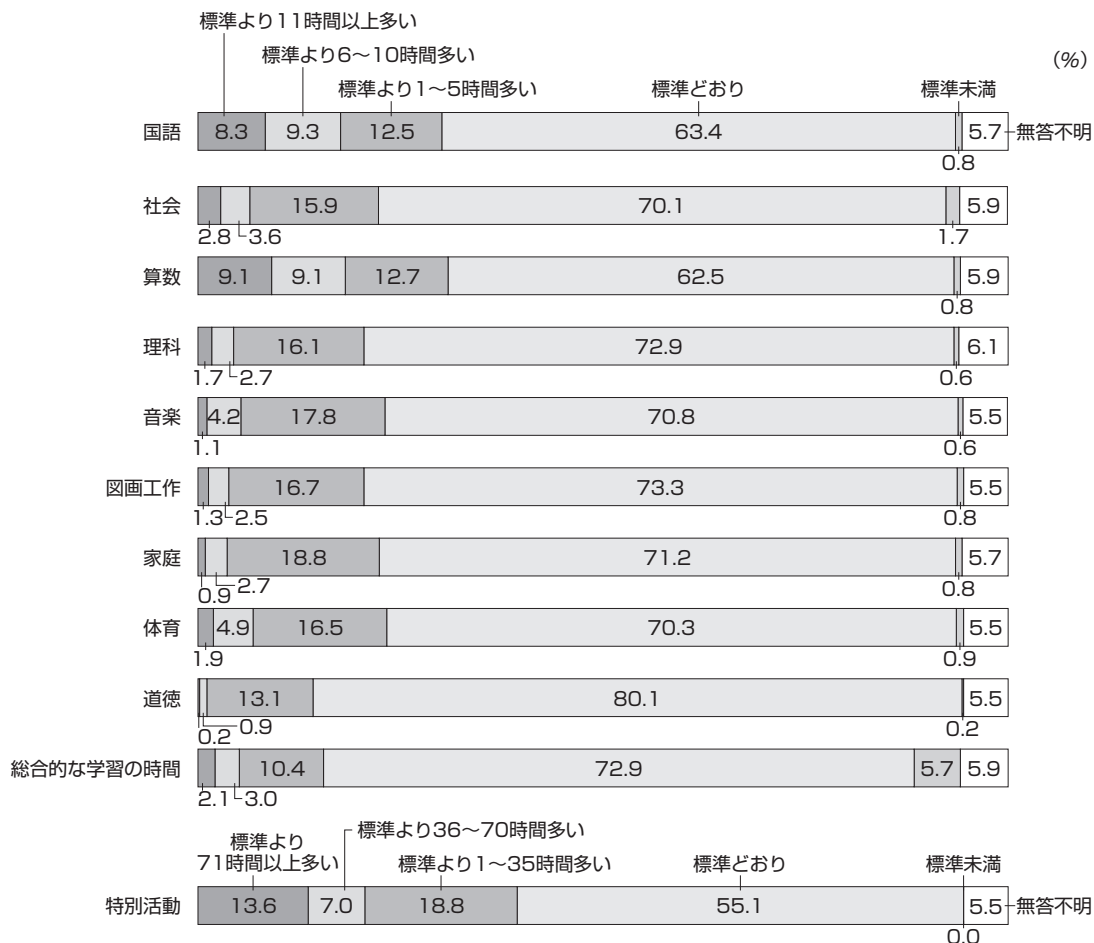
「標準どおり」以外で典型的な9つのタイプを図1-1-5にあげてみよう。

a 「標準授業時数で英語振り替え型」：年間総授業時数は標準の945時間だが、その内訳を変えて「英語」を35時間組み入れているタイプ。特区に認められている地域でみられた。

b 「全般型①」「全般型②」：①は年間総授業時数を標準より31時間多く976時間に、②は年間総授業時数を1053時間と標準より100時間以上多く設定して、多くした時数を全教科・領域で分けているタイプで、多くのケースがみられた。

c 「国・算型」：年間総授業時数を10～20時間程度多く設定して、多くした時数を「国語」

図1-1-4 年間授業時数の設定状況（小6生／教科・領域等別）（n=528）



注) 授業時数についての選択肢の区分と表記のしかたは巻末の基礎集計表(学校調査)と異なっている。また、標準より多い選択肢に対応する数値については、基礎集計表とは表示のしかたを変えている。

と「算数」で分けているタイプ。似たタイプとして「算数」だけ多くしているケースもみられた。

d 「英語型」：年間総授業時数を35時間多く設定して、多くした時数を「英語」にあてているタイプ。

e 「全般+英語型」：年間総授業時数を標準より100時間程度多く設定して、多くした時数を全教科・領域で分けたほかに、英語も加えているタイプ。

f 「特別活動型」：標準を超えている時数はすべて、「特別活動」のうち標準授業時数で示されている学級活動以外の児童会活動、クラブ活動、学校行事などの時間にあてているタイプ。

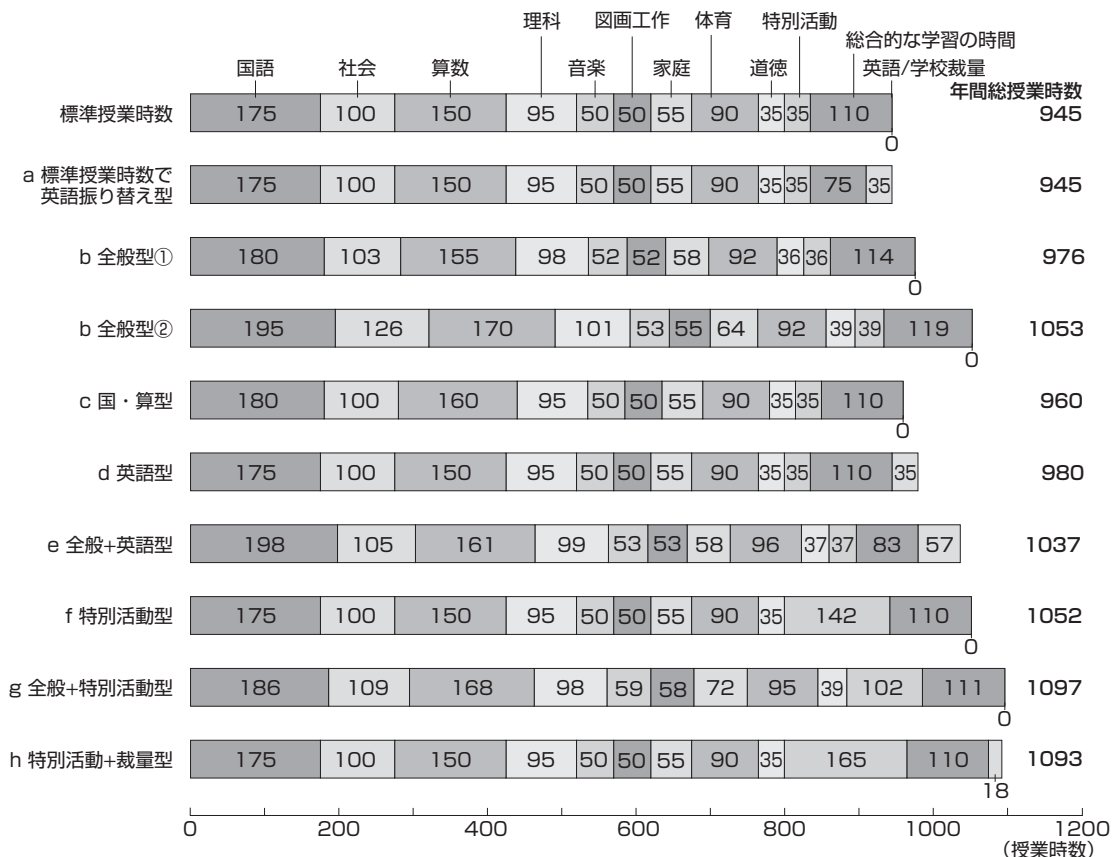
g 「全般+特別活動型」：年間総授業時数より100時間を大きく超えて設定して、多くした時数

を全教科・領域で分けているが、とくに「特別活動」に多くの時数をあてているタイプ。

h 「特別活動+裁量型」：年間総授業時数より100時間を大きく超えて設定して、多くした分を「特別活動」と「学校裁量」の時間にあてているタイプ。

以上のように、年間総授業時数の設定もその内訳も多様になっている。詳細は割愛するが、02年調査の際にみられた配当例のタイプと比べて、より複雑かつ多様になっている。その背景には、次節でみるように、時間割設定の工夫がさまざまに取り組みられてきていることによると考えられるが、それによって、小学校では教科や領域等の授業時数の配当まで含めた授業時数の設定の多様化がますます進んでいるようだ。

図1-1-5 教科・領域等の配当例（小6生）



注) 各校の回答から「標準どおり」以外の典型的なパターンについて例示した。なお、英語/学校裁量については調査票ではたずねていないが、欄外の記述を参考に作成した。

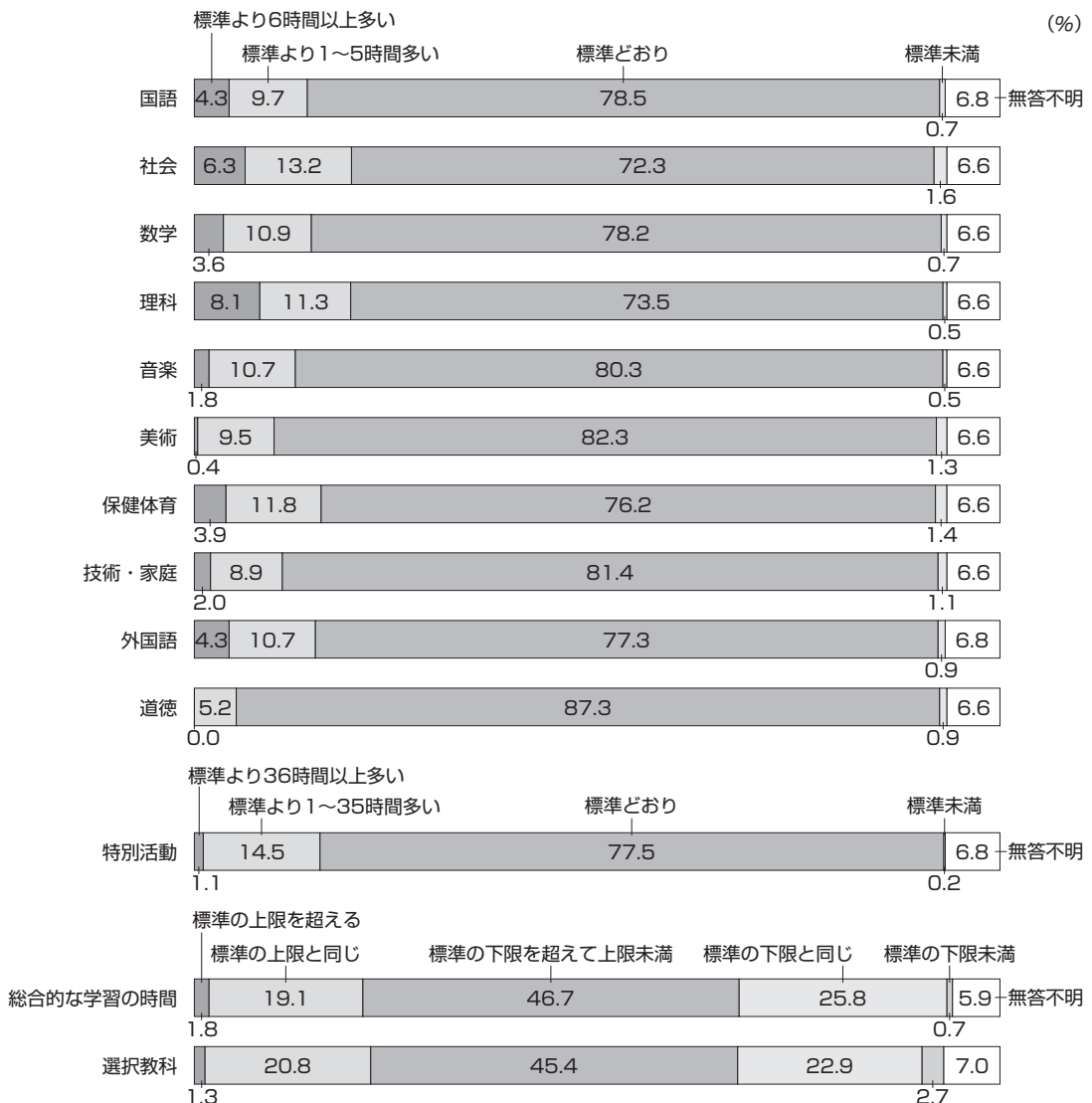
6) 中学校の教科・領域等別では「社会」「理科」の順に標準授業時数を超過する設定

つづいて、図1-1-6から中3生についてみていこう。標準授業時数を超過している割合は、「社会」と「理科」が20%弱、「保健体育」「特別活動」「外国語」が15%ほどで、もっとも少ない「道徳」の5.2%のほかは10%前後となっている。標準授業時数の設定に下限と上限が示されている「総合的な学習の時間」と「選択教科」は、約9割がその範囲内に設定している。「標準の上

限と同じ」と多めの設定にしているのはいずれも2割ほど、「標準の下限と同じ」と少なめの設定にしているのはいずれも2割強となっていて、両者を合わせた235時間をそれぞれの上限と下限の間で多様な時数設定にしている様子がうかがえる。

7割の中学校が年間総授業時数タイプの「標準型」だったように、教科や領域等に担当する授業時数にも目立った多様性はみられない。しかし、「選択教科」の授業時数の設定が上限から

図1-1-6 年間授業時数の設定状況（中3生／教科・領域等別）（n=559）



注)「国語」～「特別活動」までの授業時数について、選択肢の区分と表記のしかたは巻末の基礎集計表(学校調査)と異なっている。また、標準より多い選択肢に対応する数値については、基礎集計表とは表示のしかたを変えている。



下限まで幅広く分布していることから、「選択教科」の内訳によって多様化を図ろうとしていると考えられる。

では、個々の中学校では各教科・領域等の年間授業時数を実際にどのように配当しているのだろうか。「標準どおり」以外で典型的な6つのタイプを図1-1-7にあげてみよう。

a 「標準授業時数で内訳変更型」：年間総授業時数は標準の980時間だが、その内訳を変えて一部の教科の時数を多くしているタイプ。この例では「選択教科」の時数の一部を、はじめから各教科に割り振っている。

b 「全般型①」「全般型②」：①は年間総授業時数が標準より19時間多く、②は年間総授業時数を標準より70時間多く設定して、多くした時数を基本的に全教科・領域で分けているタイプで、多くみられた。

c 「特別活動型」：標準を超えている時数はすべて、「特別活動」のうち標準授業時数で示されている学級活動以外の生徒会活動、学校行事な

どの時間にあてているタイプ。

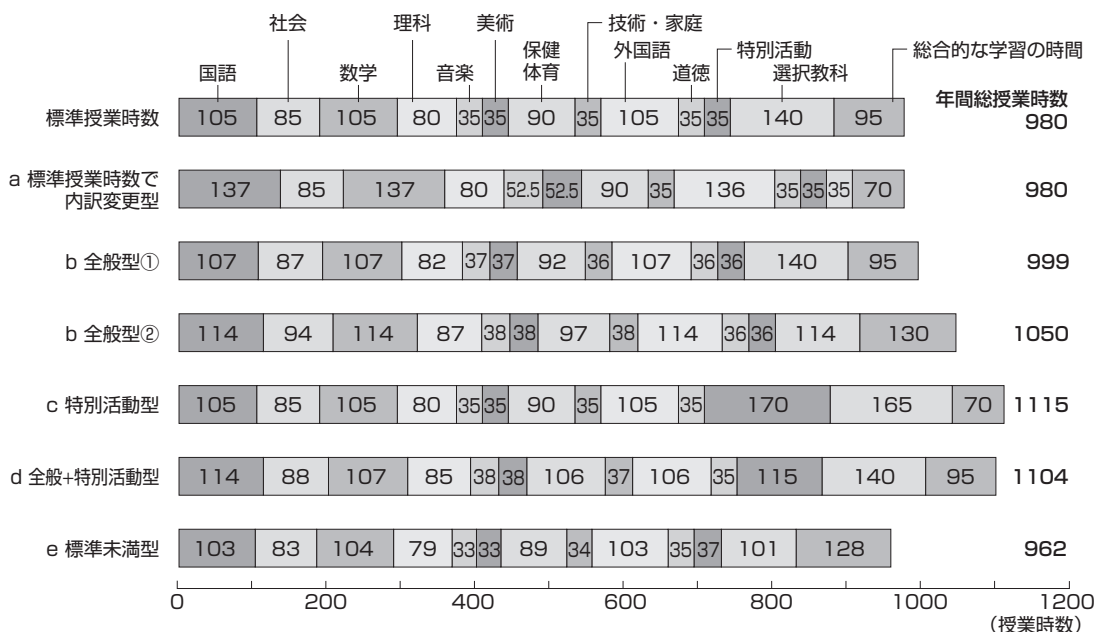
d 「全般+特別活動型」：年間総授業時数を標準より100時間を超えて設定して、多くした時数を全教科・領域で分けているが、とくに「特別活動」に多くの時数をあてているタイプ。

e 「標準未満型」：年間総授業時数が標準を下回っており、その分各教科・領域等も標準を下回っているタイプで非常にまれなケース。

以上のほかに、年間総授業時数を小幅に超過して、多くした分を、いわゆる5教科のみに多く配当しているケースや、「英語」と「数学」のみに多く配当しているケース、「学校裁量」の時間にあてているケースなどもみられた。

しかし、学校行事や生徒会活動などの時間を「特別活動」に組み込むことで年間総授業時数が標準を大幅に超えているケースを除けば、年間総授業時数の設定の多様性は小学校より小さく、各教科・領域等の授業時数の配当の多様化は「総合的な学習の時間」と「選択教科」の時数設定の範囲にとどまっているようだ。

図1-1-7 教科・領域等の配当例（中3生）



注) 「選択教科」の標準授業時数は105～165時間、「総合的な学習の時間」の標準授業時数は70～130時間。「標準授業時数」では、ケース数の多い時間設定をモデルとして示した。

## 第2節

## 時間割設定の工夫

時間割設定の工夫は小・中学校とも「朝読書など教育課程外の学習活動」の9割台がトップ。小学校で、02年調査と比べて増えた工夫は「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」(29.1ポイント増)、「二学期制、二期制」(14.3ポイント増)、減った工夫は「従来より1時間多く授業する曜日がある」(27.7ポイント減)、「30分や60分などの弾力的な授業時間」(23.0ポイント減)。  
【Q3(学校)】

現行の学習指導要領のもとで、完全学校週5日制の実施や授業時数の削減、時間割の弾力的な編成が認められたことに加えて、学力低下の懸念が社会問題となってきたことを受けて、前節でみたとおり、多くの学校では、標準年間授業時数の確保にとどまらず、標準を超過する授業時数を設定するようになってきている。では、現在、小・中学校では、そのために時間割設定にあたってどのような工夫をどのくらいの学校がしているのだろうか。時間割設定の工夫について学校調査の結果からみていくことにしたい。

1) ほとんどの小学校が「朝読書など教育課程外の学習活動」を行い、3分の2が「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」

図1-2-1は、小学校で取り組まれている時間割設定の工夫をまとめたものである。「朝読書など教育課程外の学習活動」の96.8%がもっとも多い。これは、2章で詳しくみるように、学力低下の懸念が社会問題化するなかで、文部科学省から出された『学びのすすめ』などを受けて全国的に取り組まれるようになったものだ。

つづいて「始業式などの学校行事のある日に

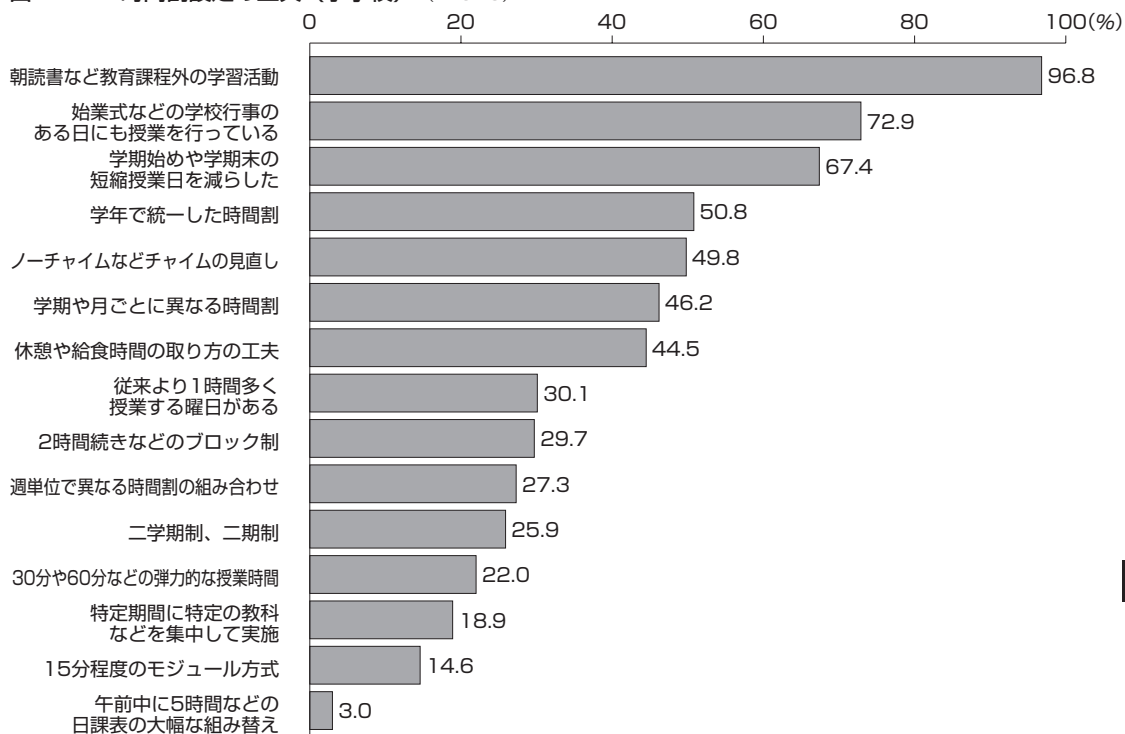
も授業を行っている」(72.9%)、「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」(67.4%)が多く、これらの工夫は完全学校週5日制による授業日数の削減にもなるとられた工夫といえる。その点では、「二学期制、二期制」を導入するケースが増えているように見受けられるが、25.9%と全国的にはまだ少数派だ。

時間割の弾力的な編成の例としては、「ノーチャイムなどチャイムの見直し」の49.8%が目立つ程度で、「2時間続きなどのブロック制」が29.7%、「30分や60分などの弾力的な授業時間」が22.0%、「15分程度のモジュール方式」が14.6%と、取り組んでいる割合は少ない。

2) 中学校で取り組まれている時間割の工夫のトップ・スリーは「朝読書など教育課程外の学習活動」「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」「学期や月ごとに異なる時間割」

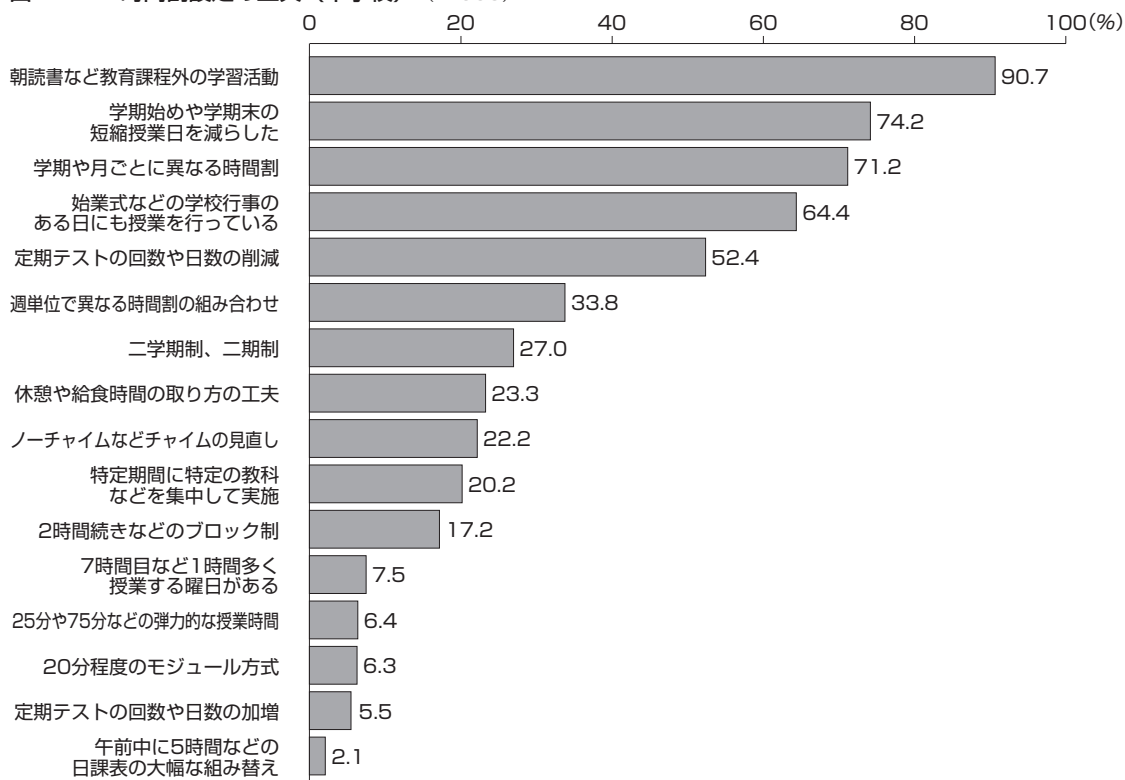
図1-2-2は、中学校で取り組まれている時間割設定の工夫をまとめたものである。もっとも多く、小学校と同じ「朝読書など教育課程外の学習活動」の90.7%である。つづいて「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」(74.2%)、「学期や月ご

図1-2-1 時間割設定の工夫（小学校）（n=528）



注) 数値は「やっている」の%。

図1-2-2 時間割設定の工夫（中学校）（n=559）



注) 数値は「やっている」の%。

とに異なる時間割」(71.2%)、「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」(64.4%)、「定期テストの回数や日数の削減」(52.4%)までが半数以上の学校で取り組まれている工夫である。このうち「学期や月ごとに異なる時間割」は、多くの教科・領域等の標準年間授業時数が35で割り切れないこと(週に1時間とすると年間で35時間となる)による取り組みだろうが、それ以外は、主に完全学校週5日制の導入を受けて授業日や授業時数を確保したり、標準授業時数を超過する時数設定にしたりするための工夫だ。

時間割の弾力的な編成としては「ノーチャイムなどチャイムの見直し」の22.2%がもっとも多く、「2時間続きなどのブロック制」(17.2%)、「25分や75分などの弾力的な授業時間」(6.4%)、「20分程度のモジュール方式」(6.3%)と続き、小学校よりも取り組んでいる割合が少ない。教科担任制の中学校では教科間の調整が必要な取り組みはなかなか難しいようだ。

このように、中学校で取り組まれている時間割設定の工夫は、完全学校週5日制や授業時数の削減を受けて、授業時数の確保や標準授業時数を超過する設定のための対応が中心であるといえよう。

### 3) 「標準超過型」の小学校で取り組まれているのは「ノーチャイムなどチャイムの見直し」「休憩や給食時間の取り方の工夫」「二学期制、二期制」

ところで、年間総授業時数タイプが「標準型」

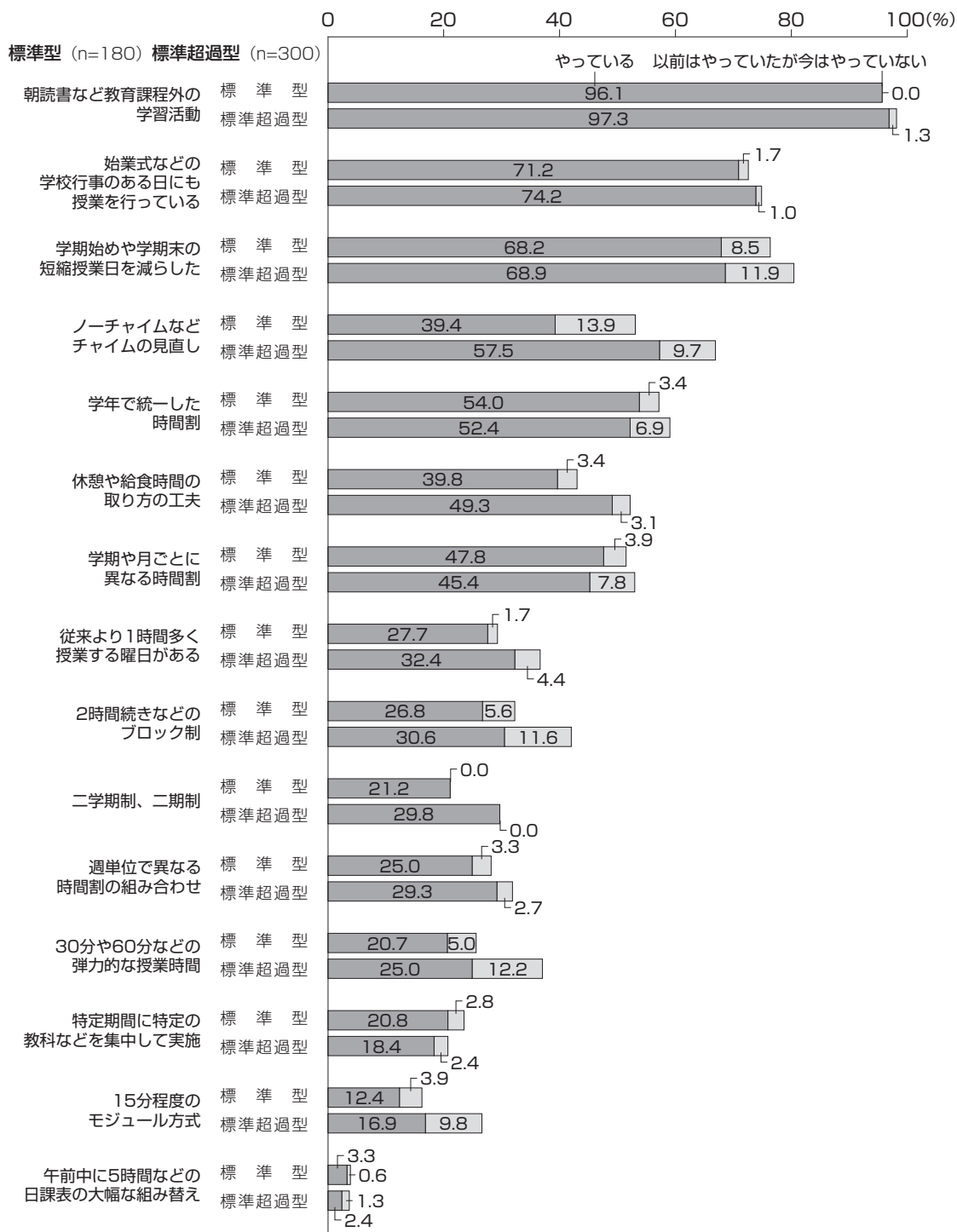
の学校と「標準超過型」の学校では、取り組んでいる時間割設定の工夫に違いがあるのだろうか。図1-2-3は、時間割設定の工夫を「やっている」と「以前はやっていたが今はやっていない」の割合について小学校の「標準型」と「標準超過型」とを比べたものだ。

「やっている」割合が「標準超過型」のほうが「標準型」よりも多い工夫は、「ノーチャイムなどチャイムの見直し」(18.1ポイント差)、「休憩や給食時間の取り方の工夫」(9.5ポイント差)、「二学期制、二期制」(8.6ポイント差)などである。

また、「以前はやっていたが今はやっていない」の割合が「標準型」と「標準超過型」で異なる工夫もみられる。「標準型」のほうが多いのが「ノーチャイムなどチャイムの見直し」(4.2ポイント差)で、「標準超過型」のほうが多いのが「30分や60分などの弾力的な授業時間」(7.2ポイント差)、「2時間続きなどのブロック制」(6.0ポイント差)、「15分程度のモジュール方式」(5.9ポイント差)である。ただし、「標準超過型」のほうが多い3項目については、「やっている」割合も「標準超過型」が多いことから、「標準超過型」の学校が、これまで多くの時間割の工夫を試みてきた様子がうかがえる。

以上のように、「標準型」と「標準超過型」で、時間割設定の工夫に極端に大きな違いがあるわけではないが、それぞれの授業時数設定に見合ったさまざまな工夫をしている。

図1-2-3 時間割設定の工夫（小学校／年間総授業時数タイプ別）



注1) 「標準型」「標準超過型」の分類については、1節図1-1-2 (p.24)を参照。なお、「標準未満型」「無答不明」は省略した。  
 注2) 時間割設定の工夫について、「やったことがない」「無答不明」は省略した。

#### 4) 中学校では「学期や月ごとに異なる時間割」は「標準超過型」、「二学期制、二期制」は「標準型」で取り組みが多い

つづいて図1-2-4から、中学校の「標準型」と「標準超過型」の時間割設定の工夫を比べてみよう。前節でみたようにもともと「標準超過型」は2割ほどしかなく（p.24、図1-1-2）、標準年間授業時数を大幅に超過するケースも少ないことから、「標準型」と「標準超過型」とで大きく異なる時間割の工夫はみられない。「やっている」の割合をみると、「学期や月ごとに異なる時間割」が「標準超過型」のほうが4.9ポイント多いことと、反対に「二学期制、二期制」は「標準型」のほうが5.2ポイント多いことがやや目立つくらいである。

また、「以前はやっていたが今はやっていない」の割合が目立つのは、「定期テストの回数や日数の削減」「学期始めや学期末の短縮授業日を減らした」「定期テストの回数や日数の加増」である。「標準型」と「標準超過型」のいずれにもみられることから、標準年間授業時数の確保や標準を超過する授業時数の設定のためとは違う理由によって、その工夫を取りやめたと考えられる。

#### 5) 小学校で02年調査と比べて増えた工夫は「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」「二学期制、二期制」、減った工夫は「従来より1時間多く授業する曜日がある」「30分や60分などの弾力的な授業時間」

現行の学習指導要領が完全実施されるようになってすでに5年が経った。その間に学力低下の懸念が社会問題になったことなどもふまえて、年間授業時数の設定が多様化してきている。そのためにさまざまな取り組みをした結果、より多く取り組まれるようになった時間割設定の工夫や、反対に取りやめた時間割設定の工夫もあるのではないかと。そこで、小学校における時間割設定の工夫について02年調査と比較した結果を図1-2-5にまとめた。なお、ここではとくに地

域特性の影響が懸念されることから、02年調査と同じ14地域に限定して分析をしている。また、02年調査と07年調査では回答の選択肢が若干異なる。ここでは実施の有無を比較するため、02年調査の「以前からやっている」+「今年度からやっている」の割合と07年調査の「やっている」割合を比較した。

02年調査と比べて取り組む割合が増えた工夫は、「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」（27.7ポイント増）、「二学期制、二期制」（14.0ポイント増）、「朝読書など教育課程外の学習活動」（9.8ポイント増）の3項目である。反対に02年調査と比べて減った工夫は、「従来より1時間多く授業する曜日がある」（29.4ポイント減）、「30分や60分などの弾力的な授業時間」（24.8ポイント減）、「特定期間に特定の教科などを集中して実施」（19.1ポイント減）、「2時間続きなどのブロック制」（19.9ポイント減）、「15分程度のモジュール方式」（14.0ポイント減）、「ノーチャイムなどチャイムの見直し」（13.5ポイント減）などである。

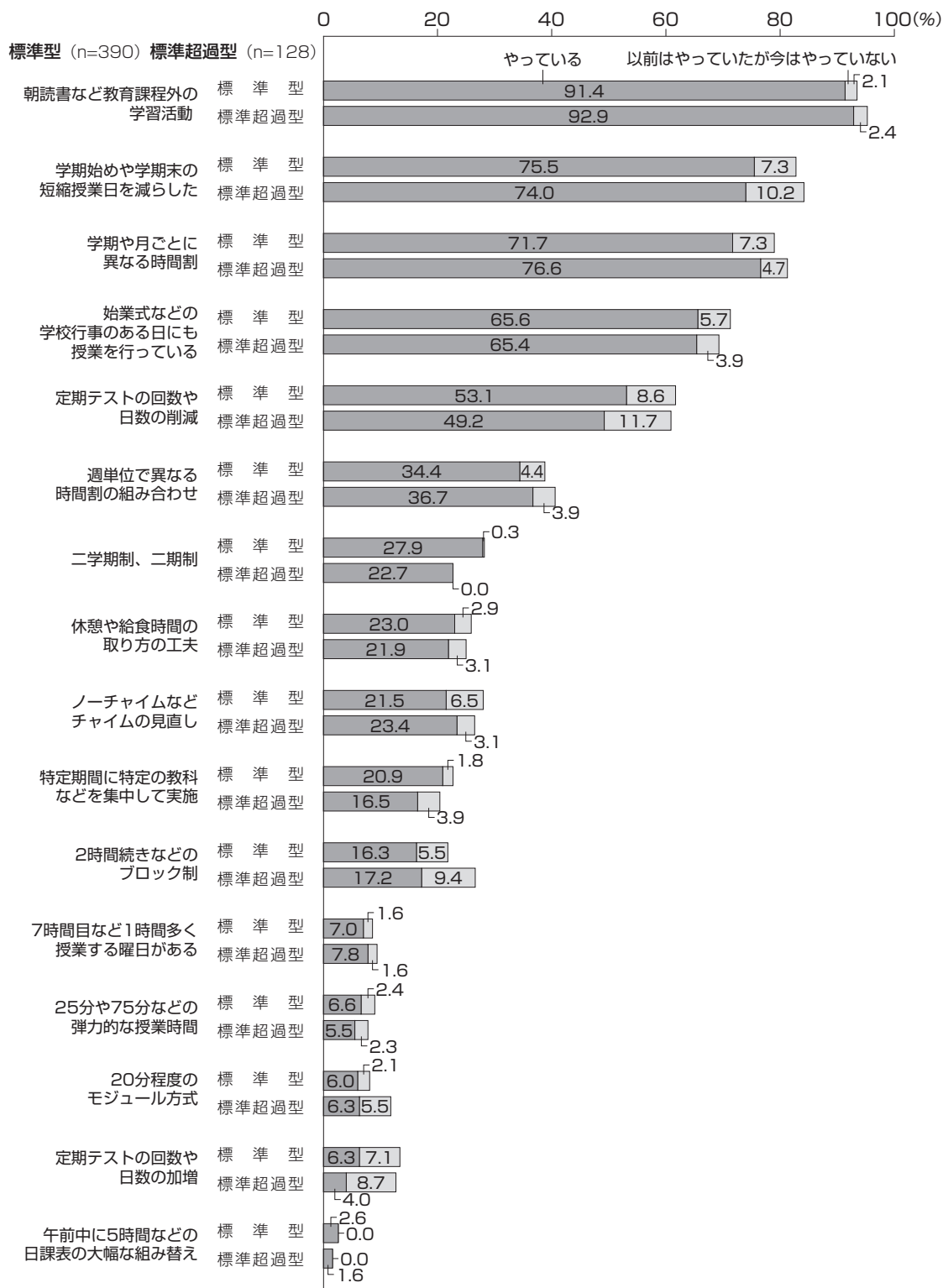
時間割の弾力的な編成の取り組みが減ってきて、標準年間授業時数の確保や標準を超過する授業時数の設定のための取り組みが増えていることと、時間割設定の工夫が特定の取り組みに収斂しつつある様子がうかがえる。

#### 6) 中学校で02年調査と比べて増えた工夫は「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」「朝読書など教育課程外の学習活動」、減った工夫は「2時間続きなどのブロック制」

つづいて中学校における時間割設定の工夫について02年調査と比較した結果を図1-2-6にまとめた（比較する割合については、小学校と同様）。

02年調査と比べて取り組む割合が増えた工夫は、「始業式などの学校行事のある日にも授業を行っている」（20.1ポイント増）、「朝読書など教育課程外の学習活動」（16.7ポイント増）、「二学期制、二期制」（10.1ポイント増）、「週単位で異なる

図1-2-4 時間割設定の工夫（中学校／年間総授業時数タイプ別）



注1)「標準型」「標準超過型」の分類については、1節図1-1-2 (p.24)を参照。なお、「標準未満型」「無答不明」は省略した。

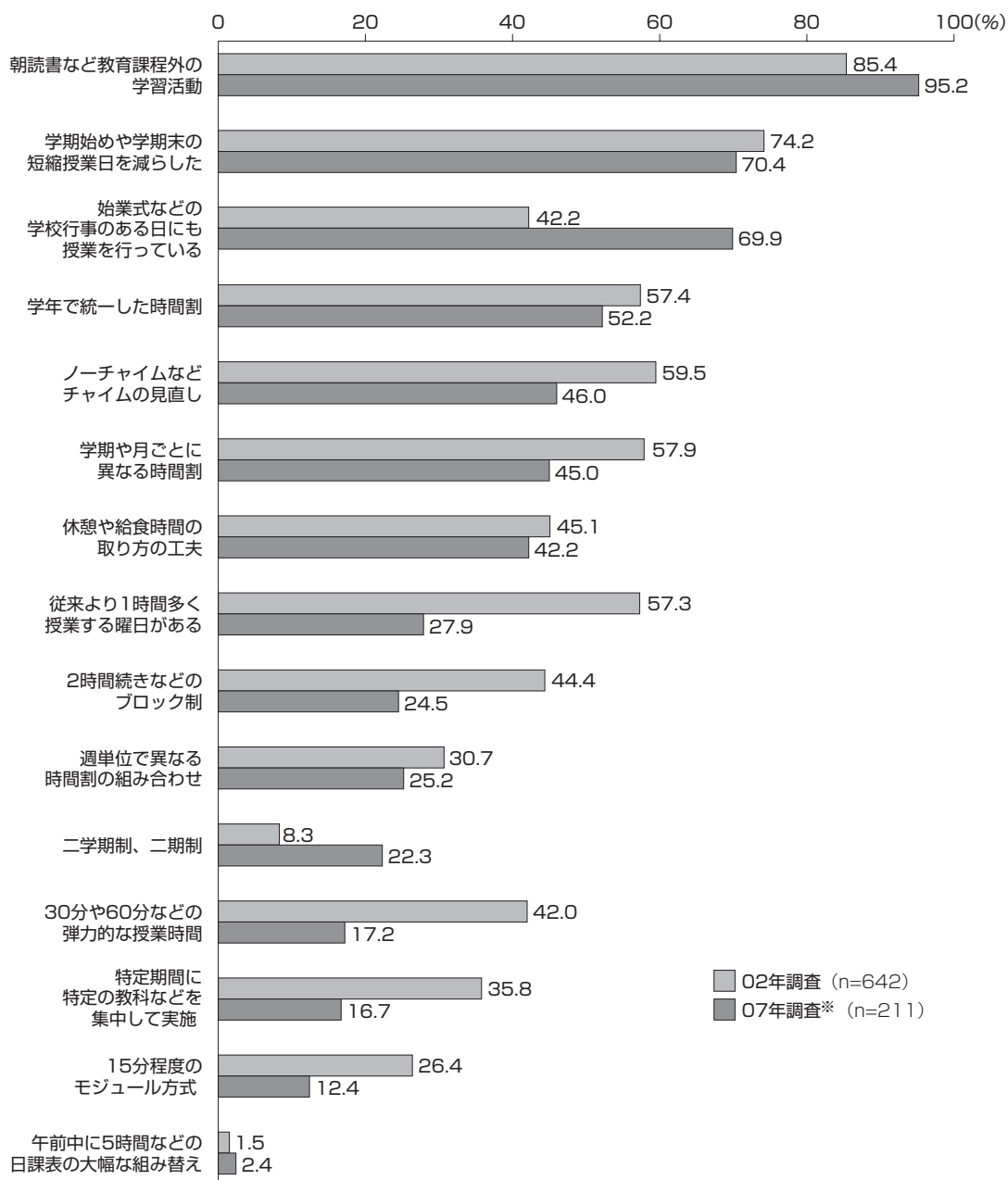
注2) 時間割設定の工夫について、「やったことがない」「無答不明」は省略した。

時間割の組み合わせ」(7.1ポイント増)である。反対に02年調査と比べて減った工夫は「2時間続きなどのブロック制」(7.8ポイント減)で、その他の項目は5ポイント未満の増減にとどまる。

小学校に比べて中学校は、02年調査時から

ともと取り組まれている時間割設定の工夫の種類は少なかったが、その数少ない工夫に取り組む学校が増加する傾向がみられたことから、中学校でも時間割設定の工夫が特定の取り組みに収斂しつつあるといえるだろう。

図1-2-5 時間割設定の工夫（小学校／地域限定・経年比較）

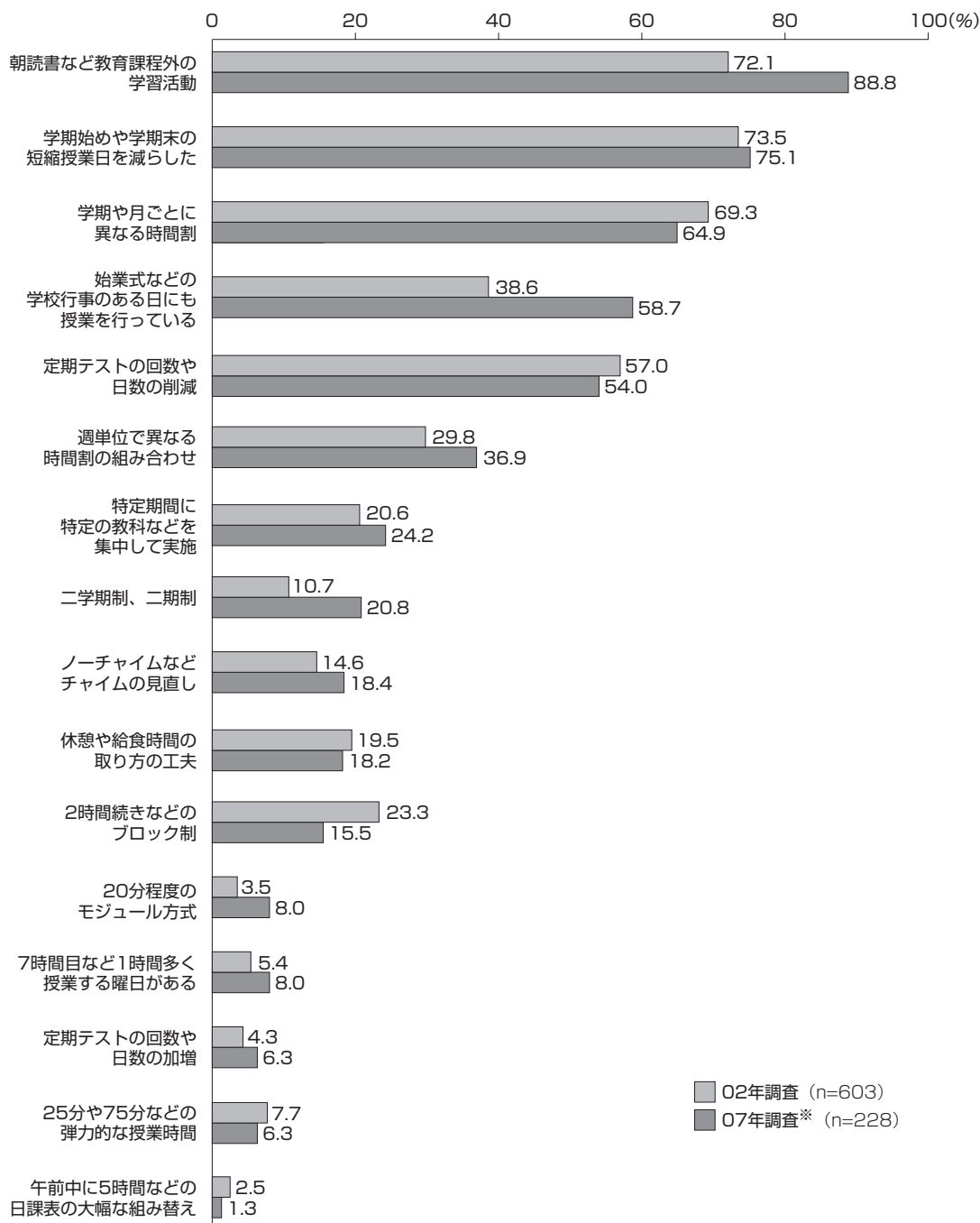


注) 02年調査は「以前からやっている」+「今年度からやっている」の%、07年調査は「やっている」の%。いずれも「無答不明」は分析から除外した。

※ 07年調査は、02年調査と同じ14地域に限定した母数で値を算出した。



図1-2-6 時間割設定の工夫（中学校／地域限定・経年比較）



注) 02年調査は「以前からやっている」+「今年度からやっている」の%、07年調査は「やっている」の%。いずれも「無答不明」は分析から除外した。

※ 07年調査は、02年調査と同じ14地域に限定した母数で値を算出した。